

令和4年度 第1回 2科・4科・GLC入試

開智日本橋学園中学校

国語

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子及び解答用紙を開かないでください。
- 2 試験中に問題冊子の不鮮明・ページの落丁・乱丁・解答用紙の汚れなどがあった場合は、手をあげて試験監督の先生に知らせてください。
- 3 問題用紙には試験開始後、すぐに座席番号・受験番号を記入してください。
- 4 解答用紙には試験開始後、すぐに座席番号・受験番号・氏名を記入してください。
- 5 解答は、解答欄をはみ出さずに、ていねいに記入してください。
- 6 試験終了の合図があったら、すぐに筆記用具を置いてください。その後、問題用紙と解答用紙を集めますので、机の上に、受験番号が見えるように置いてください。
- 7 国語の試験時間は50分です。

座 席 番 号			

受 験 番 号			

□ 次の傍線部の漢字をひらがな、カタカナを正しい漢字に直して答えなさい。

- ① 竹取物語は物語の元祖だ。
- ② かべに円い穴が開く。
- ③ 役員の座を退く。
- ④ よく効く薬を飲む。
- ⑤ 予防の必要を力説する。
- ⑥ ヒンプの差が大きい国。
- ⑦ 動物をシイクする。
- ⑧ 仏像をオガむ。
- ⑨ 新しいテチヨウを買う。
- ⑩ タイガンの火事をながめる。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは全て句読点や記号も字数に含んで答えなさい。)

① 日本人の生活サイクルには、二つの種類がある。その一つは通過儀礼といわれるもので、われわれが誕生してから、大きくなれば入学式、さらに成人式、結婚式、そして最後にお葬式があつて終わるといふ、たいていの人が通り抜ける儀式のことで、二つめは、一年を単位にした年中行事という生活単位のことである。

この年中行事とは一口でいうと、一月一日から十二月三十一日までの三百六十五日間を生きてゆくために必要なルールのことである。時間は無限連続で単調に続いてゆくものだが、時間の連続の中に切れ

目や節目をつくつていこうというのが、年中行事なのである。

このような考え方は温帯圏文化の特色ともいえるもので、熱帯圏文化では、こうした暦思想はあまり発達していない^a。赤道直下の国などへ行ってみると、一年じゅう夏なので、暦が発達しないのは当然ともいえる。また、エスキモーの住むところは冬と夏があるので、熱帯地方よりは、ややましである。

ごぞんじのように、日本などの温帯圏では、きわめて規則正しく春夏秋冬という四つの季節がある。この四つの季節をさらに分けると十二か月があり、それをさらに細分すると三百六十五日があるわけだ。そして、毎日毎日の気温が違い、^b 天気の違い、それに伴って季節によつていろいろと変化に富んだ産物ができ、食べる物も変わってくる。

このように、変化の多い自然環境の中で生きてゆくためには、自然というものをよく知っていなければならぬ^b。現在ではいろいろな食品保存法が発達していたり人工食品もあつて、一年じゅう、ない物はないぐらいになつてしまつた。

【1】昔はかなり自然をよく知っていなければ、食物が手に入らないということすらあつた。【2】生きてゆくための知恵として「自然を知る」ということが必須の条件だつたのだ。

(中略)

日本民族は、このような変化のある四季の自然の中で生活したために、自然というものを見る目が、神経質なほど精巧に鋭利に発達した。しかし、現代の文明人は、そういう点がだんだん退化して、すっかりぼけてしまつた。

昔から日本の農民や漁師たちは、その仕事上の必要もあり、いろいろな経験によつて天候の変化を予知する知識を会得してゐた。漁師が風と雲に関する言葉をたくさん知つてゐたことを、民俗研究家の柳田国男先生が書いておられるが、その数は実に、六千から七千にも及んでいる。世界でも、こんな国

はほかがない。

④ またこのことは、日本人がいかに自然の微妙な変化を観察する力を持っているかを物語っている。彼らの天気に対する予報知識は、現在の科学を総動員している気象庁の予報よりも中率が高いといわれる。

農民や漁師はなんの科学的計測器械も持っていないが、ただ永年の経験で、どの山にどういふ雲がかかるときは夕立ちがあるとか、あるいは風がどっちに向かって吹くかを知っている。このように緻密で正確な自然観察をすることによって、はじめて日本人は生きてゆくことができるのである。そういうことから、自然との密接な関係の中で、自然を恐れ、大切にしてい、いやしくもこれと対立して征服しようなどということを考えなかった。

その点、西洋文化は自然征服文化ということができ、自然に対して人間の生活は常に関係にあった。その結果、どっちが強くなるかによって、人間にしあわせが生まれるのだという考え方から、自然をなるべく押し込んで、人間の生活を広げていこうとする。

(中略)

このような発想は、もともと日本人にはなかった。自然を征服できるなどということは、初めから思ってもいなかった。自然はもつとも恐るべき神に近いものであって、人間はこれに絶対に服従すべきものだとすることを大前提としているので、日本には年中行事がちゃんと定着しているのである。

⑤ 年中行事とは、四季の変化の中における自然と人生との調和の方法をいう。それを具体的には、祭りだとか、供養だとか、縁起がいい、などという言葉で言うだけなのである。あるいは、信仰や情緒で表現するのであって、その陰にはもつと厳肅なドライな自然と人生の合一、すなわち自然の中で人生をしあわせにする知恵が生きていたのである。それが実は、日本に年中行事を作らせたのであり、現在も将

来も存在すべき意味を持っているのである。

(樋口清之『日本「ならわし」なるほど雑学』)

※精巧：細かい点まで注意が払われ、よくできていること。

※エスキモー：北極圏に住む先住民グループ。

※会得：物事を理解して、自分のものにする。

※緻密：こまかいところまで注意がいきとどいていること。

※合一：一つになること。

問一 傍線部①「日本人の生活サイクルには、二つの種類がある。」とありますが、日本人の生活サイクルを二つ、本文中からそれぞれ四字で抜き出さない。

問二 傍線部②「こうした暦思想」とは、どのような考え方のことですか。本文中の言葉を使い説明しなさい。

問三【】1・2にあてはまる適語を選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア なぜなら イ そのため ウ しかし エ ところで

問四 二重傍線部 a d の「ない」について種類の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問五 傍線部③「現代の文明人は、そういう点がだんだん退化して、すっかりぼけてしまった。」とありますが、食生活に関してどうしてこうなったのかを述べている一文を本文中から探し、最初の五字を答えなさい。

問六 傍線部④「このこと」とは、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問七 【】に入る言葉を本文中から二字で抜き出さない。

問八 傍線部⑤「自然と人生との調和」はなぜ大切にされてきたのですか。本文中の言葉を使い説明しなさい。

問九 あなたがこれまでに体験した日本の年中行事を一つあげ、どんな経験をしたかを書きなさい。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いは全て句読点や記号も字数に含んで答えなさい。)

「彼」は、大連で生まれ、中学校卒業までを大連で過ごした。次の文章は、第二次世界大戦中の一九四五年三月下旬、東京の大学の一年生であった彼が、休学をして大連へ舞い戻った場面である。

一箇月前の四月は、天候がなんとなくはぐであった。並木の柳の綿がふわふわと、静かに軽く道に漂って、通って行く人間の肩にかかったりする、のどかな春の日があるかと思うと、蒙古風と呼ばれるすさまじい風が、空いっぱいを黄色くして吹き過ぎる、荒々しい春の日があり、温かさと寒さにも、冬期におけるいわゆる「A」の情性が、まだいくらかつづいていっているようであった。

しかし、五月にはいると、一、二回の雨のあとで、空は眼を洗いたくなるほど濃い青に澄みきり、(そのように鮮やかなセルリアン・ブルーを、彼は日本の空に見たことがなかった)、風は爽やかで、気温は肌に快い暖かさになったのであった。特に、彼の心を激しく打ったのは、久しく忘れていたアカシヤの花の甘く芳しい薫である。

五月の半ばを過ぎた頃、南山麓の歩道のあちこちに沢山植えられている並木のアカシヤは、一斉に花を開いた。すると、町全体に、あの悩ましく甘美な匂い、あの、純潔のうちに疼く欲望のような、あるいは逸楽のうちに回想される清らかな夢のような、どこかしら寂しげな匂いが、いっぱいに溢れたので

あった。

夕ぐれどき、彼はいつものように独りで町を散歩しながら、その匂いを、ほとんど全身で吸った。時には、一握りのその花房を取って、一つ一つの小さな花を噛みしめながら、淡い蜜の喜びを味わった。その仄かに甘い味は、1、小学生の頃のかくれんぼ、高い赤煉瓦の塀に登って、そこに延びてきているアカシヤの枝の豊かな緑に身を隠し、その棘に刺さらないように用心しながら、その花の蜜を嘗めた、長く明るい午後などを思い出させた。そして彼は、この町こそやはり自分の本当のふるさとなのだと、思考を通じてではなく、肉体を通じて2感じたのであった。

彼の父も母も、高知県の出身であったから、彼の戸籍上のふるさとは、彼が徴兵検査と召集のために二度ほど出かけて行ったその南国の土地のほかにはなかった。実際に父祖の土地を見たとき、彼は自分が予期していた以上の好意を、その素朴でおおらかな田園に覚えた。父の生れた田野町や、その隣の母の生れた奈半利町には、戦争をしている国の一部とは思えないような静けさがあった。そして、そこで、伯母や従兄たちがふるまってくれた、鮎の塩焼、鯉のたたき、あるいは、3生きているように新鮮なちりめんじゃこの酢のものなどは、彼の飢えていた胃袋を強く魅惑した。しかし、これが自分のふるさとだという実感は、どうしても湧いてこないものであった。

彼は、自分が日本の植民地である大連の一角にふるさとを感じているということに、なぜか引け目を覚えていた。4、このことを他人に聞かせたら、恥ずかしい思いをすることになるのではないかと不安であった。というのは、この都会とその周辺には、土着人の墓場しかないということを、彼はすでにしてよく知っていたからである。つまり、大連に住んでいる彼の前世代の日本人たちは、心の中で、日本の内地のどこかにある自分のふるさとを大切にし、骨になったらそこに埋めてもらいたいと思っているようであった。また、彼のような5植民地二世は、年齢のせい、まるで根なし草のように、

ふるさといつての問題意識をふつうは持っていないようであった。

彼はふと、自分が大連の町に切なく感じているものは、主観的にはどんなに〈真実のふるさと〉であるとしても、【B】的には〈にせのふるさと〉ということになるのかもしれないと思った。なぜなら、彼の気持ちには、大連のほとんどの日本人たちから見れば、愛国心が欠乏していることになるだろうし、土着の気骨ある中国人たちから見れば、根なし草のたわごとということになるだろうと想像されたからである。このことが、彼の内部のどうしようもない矛盾に対応していることにも、彼は気づかないわけにはゆかなかった。それは、自分が大連の町にしか〈風土のふるさと〉を感じないのに、もう一方においては、日本語にしか〈言語のふるさと〉を感じないということであった。

それにしても、偶然に似てしまった言葉による連想は、実に微妙なものである。彼は、自分に意地悪く提出した〈にせのふるさと〉という言い廻しによって、いつしか、中学生のときのある経験を思い出していたのだ。もつとも、それは、言葉の相似ということだけが原因というわけでもない。生々しい記憶の蘇りであるように思われたのであるが――。

※ 中学校の三年生のときであったか、彼は学校の博物の授業で、先生からアカシヤについて教わった。それによると、大連のアカシヤは俗称でそう呼ばれているので、正確には、にせアカシヤ、いぬアカシヤ、あるいはハリエンジュと呼ばなければならないということであった。そして、大連にも本物のアカシヤが二本ほどあり、それらは中央公園の東の方の入口に近いところに生えていて、こうこういう形をしているということであった。

彼はその日、学校を出てから、電車に乗らずに歩いて帰った。一番の近道を歩いて帰ると、途中で、ちやうどそのだだっ広い中央公園を通ることになるのであった。

彼は、しかし、本物の二本のアカシヤを眺めたとき、安心した。なぜなら、にせアカシヤの方がずつ

と美しいと思ったからである。にせアカシヤは、樹皮の皺が深くて、それが少し陰気であるが、幹はまっすぐすうりと伸び、そのかなり上方ではじめて多くの枝が分岐し、それらの枝も素直に横に広がって、全体として実にすっきりした形をしているが、本物のアカシヤは、幹が少し曲がっており、本数の少ない枝もなんとなくひねくれた感じでうねっており、どうも恰好が悪いように見えたのである。本物のアカシヤの花は咲いていなかったが、もし咲いていたら、先生が黒板に色チョークを使って描いたあんなふうな花房の実物よりは、にせアカシヤの見なれた花房の方がずっと綺麗だろうと思った。

※ 彼はそのように遠い日のささやかなエピソードを、「にせ」という言葉が不当にも、ある生命の自然な美しさに冠せられていることに対する、一種の義憤を通じて想い起していたのであった。どこの愚かな博物学者がつけた名前か知らないが、にせアカシヤから「にせ」という刻印を剥ぎとって、今まで町のひとびとが呼んできた通り、彼はそこで咲き乱れている懐かしくも美しい植物を、単にアカシヤと呼ぼうと思った。

（清岡卓行『アカシヤの大連』）

※ 大連：中国東北地方の都市名。当時、日本の植民地であった。

※ 惰性：その状態が持続する性質。

※ 徴兵検査：兵役につくための検査。

※ 父祖：父や、それより前の祖先。

※ 土着人：その土地に住みついている人。

※ たわごと：ばかばかしい話。

※ 博物：生物・鉱物・地質に関する教科。

※ 義憤：正義や道理にはずれていることに対して憤ること。

問一 【Aに本文中のこのころの氣候を表す、漢数字を使った四字熟語を、漢字で答えなさい。

問二 1 1～5にあてはまる適語を選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しみじみと イ いわば ウ まるで エ たとえば オ もし

問三 傍線部①「この町こそやはり自分の本当のふるさとなのだ」と感じたきつかけとなつた具体的な内容が描かれている部分はどこですか。本文中から探し、初めの五字を答えなさい。

問四 傍線部②「肉体」の対義語を漢字で答えなさい。

問五 傍線部③「なぜか引け目を覚えていた。」について、なぜ彼は引け目を覚えていたのですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④「根なし草のように」とは本文中ではどういうことをたえていますか、答えなさい。

問七 【Bに最適な語を、漢字二字で答えなさい。

問八 傍線部⑤「どうしようもない矛盾」とは、どういうことの矛盾ですか。最適なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大連に対する今の心情と中学生のときの経験にまつわる心情の矛盾。

イ 大連に対する愛国心の欠乏と日本のふるさとに対する愛情の欠乏の矛盾。

ウ 大連に対する強い愛情と日本語にしか（言語のふるさと）を感じないという矛盾。

エ 大連に住む中国人に対する尊敬の念と日本人に対する思いとの矛盾。

問九 傍線部⑥「言葉による連想」とありますが、何が何を連想させたのですか。本文中の言葉を使い五十字以内で説明しなさい。

問十 「にせアカシヤ」の思い出によって彼は自分のふるさとをどう思う気持ちになったのですか。四十五字以内で説明しなさい。

問題は以上です。

⑥	①
⑦	②
⑧	③
⑨	④
⑩	⑤

問一

問二

問三

1



2



問四



問五

[illegible]

問七

問八

問九

問一

問二

- 1 
- 2 
- 3 
- 4 
- 5 

問三

問四

--

[illegible]

問六

問七

問八

--

[illegible]

問十

三

計	
	※

座席番号		受験番号				
氏 名						